

# いしや先生

町おこし映画顛末記

⑦

あべ 美佳

映画の脚本が上がった。といっても、まだ「初稿」というやつで、ここから決定稿に至るまで、さらに何度も何度も直しを重ねていくことになる。足かけ3年、ようやく生み出した初稿は、2時間半の超大作になってしまった。んだってよー、いっぱいあるんだもの、面白いエピソードが。プロデューサー陣に「あべさん、長いです」と言われ「ほだなごど、分がってる」と心の中で言い返す。分数の長さ、そのまま予算に直結するから、とても大事なのだ。

初稿の中身に関しては、ありがたいことに、とても好評だ。中には、こんな感想をストレートに伝えてくださった方もいる。「いやあ、面白かった！ 大変失礼だけど、もっと説教くさい話になるのかと……」。

うん、ホレは失礼だな。んでも、とっても嬉しいですよ。はい。こんなふうには、喜んでいるのか怒っているのか迷ってしまう感想を頂きながら、私たちは今、確かな手応えを感じている。この物語はきつと、たくさん人の心に響く作品になるー。

## 聖人よりも人間らしさ

執筆中、ペンを走らせながら自分でもポロポロ涙を流していることもあった。悲しいからではない。志田周子の生きざまを追

物語に実在のモデルがある時、映画を作る側の配慮は、より一層デリケートな作業になる。丹念に史実を紡いでいく歴史ドキュ

メンツのような作り方もあるだろう。だが今回、私は「エンターテインメントに徹して作りましょう」と提案した。ことあることに、あえて何度も繰り返しているのは「これは実在する人物がモデルだが、つくりものですよ」ということだ。

なぜなら、エンターテインメントの魔法にぐるんであげる方が、逆に鋭いものが描けるから。志田周子は、今でこそ村人にとって「神さま」だが、情報不足の当時にあっては、なかなか医師として受け入れてもらえず、数々の酷い目にも遭っている。「おらだの宝もの」を描くのに、そのおらだが(期せずして)行ってしまった数々のむごい仕打ちをそのまま描いては、当事者がいたたまれない。かといって、そこを甘くしてしま



まり、面白くなくなってしまう。そこであえて「つくりもの」にする。私の出番だ。

このプロジェクトに携わって以来、主人公のことを皆があまりに「聖人君子」にしたがるので、私はそのことが気になっていた。つまり面白くないと思った。誰がそんな立派な女性の物語を見たいかしら？と。皆さんが思い描く立派な女性、実はとっても人間くさくて、めんこい女性だったことを描きましょう。皆が知らない周子先生がきつといるはずなのだ。そして事実、いろんな顔が取材を通して見えてきた。作品として皆さんの前にお披露目できた時には、ぜひ、そのあたりを注目してもらえたら嬉しいですよ！

（脚本家・作家、尾花沢市出身）

11月1日掲載します